

論文の内容の要旨

論文題目 The Efficacy of Keyword Captions on the Improvement
of EFL Students' Listening Comprehension
(キーワードキャプションの聴解補助効果に関する研究)

氏名 菊地 俊一

近年、語学教育におけるコンピューターの活用がさかんになり、かつての LL 教室は CALL(Computer Assisted Language Learning)教室へと様変わりしつつある。CALL の環境下では従来の音声テープによる語学学習に加えて、学習者の動機付けの観点から映像教材の果す役割が大きい。本研究の研究対象教材となった英語字幕付映画もそうした教材の一つである。本来、英語字幕付映画は聾啞者のためにアメリカを中心に研究・開発されたものであったが、1985 年頃から日本にも輸入され、大学を中心とする教育機関で健常者に対するその効果が試されるようになった。1990 年当初には「映像、音声、字幕の三位一体による語学学習」として脚光を浴びたが、高校生のようなまだ初級レベルの学習者にはその効果は必ずしもプラスに作用するわけではなかった。

筆者もまたいくつかの実験を行ったが、情報源の重なりが映画の内容理解にどう影響を及ぼすかをみる実験で、「映像+英語字幕」の条件と「映像+英語音声+英語字幕」の条件で視聴した場合とでは内容理解にほとんど有意差が認められなかった。その結果生じた疑問は「後者の条件下における英語音声の役割は何か」ということであった。「後者の条件下では、学習者は英語音声からではなく、英語字幕から情報を得ているのではないだろうか。となればこの条件下に長い間学習者を置くことはリスニング力の向上の観点からはマイナスに作用することになる。学習者を英語字幕に集中させずに英語音声に集中させるにはどうしたらよいか。」それが本研究の主題設定の理由であった。

学習者を英語音声に集中させるには英語字幕を提示しなければよいことになるが、本研究の被験者のように、中学を卒業したばかりの初級者には海外の映画を英語音声だけで理解するのは極めて困難なことである。そこで英語音声をほぼ 100%字幕化した英語字幕（以下フルキャプションと呼ぶ）ではなく、重要な単語だけをキーワードとして提示する形態の英語字幕（以下キーワードキャプションと呼ぶ）にしてみたらどうかと考え、予備実験が行われた。その結果、フルキャプションの 30%程度をキーワードとして与えても映画の内容理解に影響がないことが判明し、アンケートの結果、被験者の反応も良好であった。

予備実験の結果を踏まえ、本実験では実験群として「映像+英語音声+フルキャプション」、「映像+英語音声+キーワードキャプション」、「映像+英語音声」の 3 組を設定し、加えて映像教材をまったく使用しない 1 組を統制群として設定した。キーワードはフルキャプションの中から発話の聞き取りやすさ、聞き取りにくさを考慮しながら、映画の展開に重要であると思われる名詞、動詞、形容詞が選択され、専用の字幕編集機器により編集された。被験者は高専に在籍する 1 年生で各組 40 名である。まず第 1 週目に各組のリスニングにおける有意差がないことを確かめるため Audio Test と Video Test 1、Video Test 2 によるプリテストが実施された。従来のプリテストは Audio Test に頼ってきたが、使用教材が映像教材であることと、現実社会のリスニングの状況をより反映させるため Video Test が筆者により作られた。Video Test 1 は音声だけから正解が得られる Factual Questions であり、Video Test 2 は音声や登場人物の表情から正解が得られない Inference Questions である。

第 2 週から始まる Stage I では使用語彙、発話速度、ストーリー等の総合的な分析結果から *The Never Ending Story, Episode I*(1984, U.S.)の映画が教材として選ばれた。この映画は 10 個の単元に分割され、実験群の被験者は週に 1 つの単元をそれぞれの条件で視聴し、単元の内容に関する確認テストを受けた。確認テストはキーワードが直接的なヒントとなる keyword-related questions とそうではない keyword-unrelated questions から構成されるよう工夫され、必ず 1, 2 問の Inference Questions が含まれるようにもなっていた。Stage I 終了後の第 12 週には Middle-test として Video Test 1、Video Test 2 とは異なる映像を使用した Video Test 3 が実施された。そのねらいは Stage I 直後には効果が確認されなくても Stage II の終わりには効果が確認されるかもしれないと考えたからである。

第 13 週から始まる Stage II では Stage I よりやや難易度が上がる *Forever Young*(1992, U.S.)が映画教材として選択された。Stage I 同様に被験者は毎週、単元の内容に関する確認テストを受けた。本実験は第 22 週で終了し、第 23 週にはポストテストとして Audio Test、Video Test 1、Video Test 2、Video Test 3 が実施され、加えて被験者にとってまったく初めて出会う映像を使用して Video Test 4 が実施された。

ポストテストの結果、すべてのテストにおいてキーワードキャプション組が他の組よりも高い伸びを示した。キーワードキャプション教材で訓練された被験者は、実験当初は必ずしも keyword-unrelated questions への正解率は高くはないが、訓練期間が進むにつれて徐々に正解率が高まるであろうと予想された。その理由は、キーワードが直接的なヒントになる keyword-related questions への解答で得られた情報を効果的に活用しながら keyword-unrelated questions の解答が促進されると考えられたからである。Keyword-unrelated questions に答えるためには文字情報から正解が得られないので音声から情報を得なければならない、つまり音声に集中することになる。これに反してフルキャプション組では keyword-related であれ keyword-unrelated であれ、両者の質問の正解は文字情報として画面に提示されていることになるので、必ずしも音声から正解を得る必要はない。こうした状況を継続すると、フルキャプション組では文字情報からの情報収集に慣れてしまい、結果としてリスニング力がつかなくなる可能性も否定できない。キーワード組では、確実に音声に集中しなければ正解が得られない状況が設定されているため、そうした状況下で長期的に訓練を行うことにより、文字情報と音声情報とを効果的に機能させる戦略を獲得し、フルキャプション組よりはリスニング力が伸びるはずである。それが本実験の大きなテーマであった。

第二言語の語学学習におけるキーワードキャプションの効果に関する先行研究は筆者の知り得た範囲では Hwang (1991)、Guillory (1997) の 2 件だけであり、しかも英語のキーワードキャプションは Hwang のみであり、極めて限られていることを指摘せざるを得ない。本研究では、これまでリーディングとの関連で研究が行われていたキャプション分野をリスニングとの関連からアプローチし、被験者の年齢、実験のデザイン、実験期間、教材開発への示唆等において、この分野におけるパイロットスタディ的存在として有意義な結果を示したといえる。とりわけ教材開発の観点から、キーワードキャプション教材は学習者が字幕なしで映画を理解できるようになる前の段階の橋渡し教材として機能させることが可能であり、学習者の好みに応じてキーワードの割合を 75%、50%、25% 等に調整可能な教材が開発されれば理想的である。また、映画がリスニング力を高める教材の一つになり得ることが判明したので、メディア世代に育った学習者に対応する授業科目として英語教育のカリキュラムの中に「映画英語コース」として位置付けることが可能である。キャプション研究の中心ともいえるべきアメリカの WGBH-TV 放送局では 2001 年から国家プロジェクトとしてフルキャプションとキーワードキャプションの同時放送を開始し、その効果を聾啞者だけでなく健常者にも試している。WGBH-TV では急増するアジア系留学生への教材開発への示唆として筆者の本研究の結果に強い関心を示しており、今後は互いに交流を深めながら研究を継続していきたいと考える。